Institute of Oriental Studies, Daito Bunka University

大東文化大学

東洋研究所所報

2014.12　No.62

目次

所長任期満了にあたって　山田　準……………………　1
公開講座「アジアの民族と文化」
　第１回講座概要　田中 良明……………………………　2
　第２回講座概要　齋藤 俊輔……………………………　3
　第３回講座概要　林　　裕………………………………　4
2009年度～2013年度刊行『東洋研究』論文目録
（172号～191号）……………………………………………　5
東洋研究所刊行物
（2014年７月～2015年３月）…………………………………7
東洋研究所の理念・目的…………………………………………8

所長任期満了にあたって

所長　山田　準

３期６年間所長職を務めて参りました。当初は先代、先先代の所長に支えられながら、６人体制で研究所の運営を引き継ぎ、古い伝統を守りながら、研究所を取り巻く環境に対応してまいりました。研究所の国際化を図るべく、国外の研究所との交流を深めようと、吉林師範大学の東亜研究所との交流協定を締結することになり、幸い当時は日中関係も良好で、国際交流センターの協力を得て順調に締結することができました。他の国の研究機関との交流も試みましたが、ヨーロッパ諸国は経済問題や大学改革などで、交流協定を締結するまでには至りませんでした。お二人の定年を前に、その後も６人体制を維持すべく大学に要望してきましたが、定員４人の数字は動かせないとのことで、４人体制で運営することになった矢先、突然、同僚との永遠の別れに遭遇し、補充人事として、新人の採用準備に入り、なんとか定員の４人体制を維持することができ、研究所の出版事業の継続も確保できることになりました。研究所の主な事業として、研究部会による研究会、年４冊の「東洋研究」の発行、秋の公開講座の開催、研究部会の研究成果の出版、国際交流事業の一環としての外国人講師による講演会、国際交流シンポジュームなどの共催など、管理委員の諸先生方のご意見や協力を得て運営して参りました。予算削減の中、各研究部会の皆様には十分な予算確保もできず、手弁当で研究会に参加いただき様々なご意見やご協力をいただいております。特に、海外の先生方や研究者から「東洋研究」の英文化や以前発行しておりました英文の論文集「EX ORIENTE」の復刊を希望するご意見もいただき、いろいろと外国人の立場から協力をして頂くことになり、外国人による研究部会が新しく発足しました。それを受けて英文の論文をできるだけ「東洋研究」に掲載し、海外にも研究成果を発信していきたいと思っております。しかし、学部付置研究所の統廃合の問題や、大学存続をかけての改革など、大学の研究母体として発足した東洋研究所を取り巻く環境も変化する中、大学の研究所としての役割は、学部の枠を超えた学際的な、国際的な研究成果を発信していくことが重要なことと考えております。正直なところ、この原稿を書いて所長職を無事終わることができると安堵しておりました矢先に、専任研究員の不祥事が発生し、研究所内はじめ、管理委員の諸先生方に不快な思いをさせ、大学当局にもご迷惑をおかけすることになってしまいました。今後の展開が心配されますが、一応の解決を見るまでは責任を持ちたいと思っております。研究員の皆様にはいろいろご協力をいただき支えて頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。定年まで専任研究員として、研究所の発展に微力ながら努力していく所存でございます。今後ともご支援、ご協力をお願いいたします。

（2014年12月）

公開講座「アジアの民族と文化」

2014年度（第30回）東洋研究所公開講座は、「アジアの民族と文化」を統一テーマに下記の通り開催された。受講者総数は延べ69名（一般58名、教職員11名）で、各講座の概要は以下のとおりである。
なお、長年ご出席いただいた方に対して行っている表彰状の授与は、今年は4名の該当者がいた。

◇第1回　11月6日（木）13：00～15：00　大東文化会館3階K-0302研修室
テーマ：東アジアにおける暦（カレンダー）の文化と制度
講　師：田中 良明（東洋研究所専任講師）

我々が日常的に用いる暦には、どのような由来があり、誰が決めて書いているのか？そうした日常的な疑問を出発点として、中国における暦の性質や思想文化から見た暦の意義について解説し、日本における暦の需要と展開、間近くは明治改暦から現在に至る暦の実態について紹介した。

中国の暦の淵源は、殷代の甲骨卜辞に見られる。それはすでに、干支によって日を数え、朔望月によって月を数え、十二ヶ月を一年としながらも、なお閏月を設け、一年を一太陽年に近づけようと工夫されたものだった。これは太陰太陽暦という種類の暦であり、殷王朝以降、二十世紀の初めに清王朝が滅ぶまで、約三千年の間、中国で用いられ続ける暦の基本モデルである。

そもそも中国の思想文化においては、『周易』の繫辞下伝や『尚書』の堯典・舜典に見られるように、地上を統治する君主は、天に徳を認められ、天命を受けている存在であり、天に順うことは当為であり必務でもあった。その具体例の一つが、天体を観測し、季節の推移に順い、それを可視化した暦を作成し、それを授ける「観象授時」によって民のいとなみ（農耕）を支え、治世に役立てることだった。

そのため、暦は単なる農耕の便を図るという目的ではなく、その時代の統治者が、そして王朝が、天の意志に順えているのか背いているのかを見定める一種の基準としての価値を持って存在し、暦の作成は、天命を受けた天子である皇帝の義務であり、権限でもあった。

しかし、五惑星の運行や、日月食の推算をも含む暦は、どんなに高精度のものでも次第に誤差が生じるため、二三百年が使用年数の限界となる。また、新たに天命を受けた王朝は制度を改めなくてはならない、とする「受命改制」という思想があり、中国では頻繁に改暦が行われた。紀元前104年の漢の太初改暦から辛亥革命が起こる1911年までに、中国では約48回の改暦が行われ、平均すれば約40年に一回の改暦である。

日本では百済経由で伝わった南朝の元嘉暦を推古朝から使用し始めたとされ、その後は唐の儀鳳暦・大衍暦が用いられ、ついで宣明暦が江戸時代まで823年間用いられ続けたが、ついに日本独自の暦である貞享暦が作成され、その後も宝暦暦・寛政暦・天保暦が作成、使用された。これらは全て太陰太陽暦であったが、明治5年11月に布告された詔書によって、太陽暦の使用が決定される。

しかしこの太陽暦の使用も、西洋一般に用いられるグレゴリオ暦とは異なり、閏年の計算に「神武天皇即位紀元」を用いた、西洋の「正朔（暦）を奉じる」ことを潔しとしない、東アジア独特の暦への価値観を体現した「改暦」であった。

この明治改暦による閏年の算出方法は、なおも現行法であるが、公に議論されることは少ない。また、現在我々が用いる暦も、明治改暦を担った文部省天文局の後身である国立天文台によって作成され、毎年二月の初めに翌年の暦要項が官報へ掲載される。つまり、世間には数年後分まで載ったカレンダーやスケジュール帳などが存在しているが、実のところ我々は、日本という国にとって公式とされる翌年の暦を、その前年の二月になるまで知ることができないのである。

◇第2回　11月13日（木）13：00～15：00　大東文化会館3階 K-0302 研修室
テーマ：「16世紀のポルトガル領ゴアと在地村落、そして年貢：アジアにおけるヨーロッパ勢力による領土支配のはじまり」
講　師：齋藤 俊輔（東洋研究所兼任研究員，大泉日伯センター日伯学園／日本語教師）

アジアにおけるヨーロッパ勢力による領土支配は18世紀になって本格化したとされる。とくに16世紀のヨーロッパ勢力の目的は、当時さかんだったアジア間交易への参入で、領土支配はほとんど行われていなかったし、重要でなかったと考えられている。これに対して、第2回講座では、ポルトガル領ゴアを取り上げ、16世紀における領土支配のはじまりとその重要性について検討した。

まずポルトガル領ゴアにおける領土支配構想とその進展を確認した。ゴアは1510年、ポルトガル領インディア総督アフォンソ・デ・アルブケルケによって占領され、支配が始まった。アルブケルケは最初からゴアを領土として認識していた。彼は占領後、現地人を利用し、住民から税を集めさせた。ポルトガル当局はこの構想を引き継ぎ、徴税制度を確立していった。やがてゴアには31の在地村落があり、そこから年貢が納められていることがわかった。これをうけて、当局は、「タナダール」と呼ばれる徴税官を設置し、在地村落から年貢を集めさせる制度を完成させた。

次に、ゴアにおける領土拡張について確認した。ポルトガルの領土支配はアルブケルケが占領した地域に留まらなかった。ポルトガル当局はポルトガル領ゴアの拡大を図っていたのである。1520年代にはすでにゴアから内陸へ進出しており、1548年には同地でバルデスとサルセッテという新地を獲得した。

最後に、こうした領土支配がどの程度重要だったのか、税収の面から検討した。1543年から1553年までのポルトガル領インディアの財務記録によれば、当局がゴアで集めた税は、年貢のほかに、関税や商品・サービスに関する税があった。このうち年貢が占める割合は、1543年から1547年までは十数パーセントだったが、1548年以降は四十数パーセントまで上昇した。このことから、1548年に内陸のバルデス・サルセッテを獲得してから、年貢がポルトガル領ゴアの主要な税源となったと指摘した。またあわせて財政バランスを確認すると、年貢で同地の支出をまかなえたことがわかった。この点からも、年貢が植民地運営上、非常に重要な税となっていたと指摘した。

以上の検討によって、ポルトガルがゴアを占領したときから領土支配を行なったこと、さらに領土を拡大しようとしていたこと、そして税収の観点からみて領土支配が非常に重要だったことが示された。これをふまえ、本講座では、アジアにおけるヨーロッパ勢力による領土支配は16世紀にはじまり、かつ重要な政策のひとつだったと結論づけた。

◇第３回　11 月 20 日（木）13：00 〜 15：00　大東文化会館３階 K-0302 研修室
テーマ：アフガニスタン―政治社会と農村に暮らす人々の今
講　師：林　　裕（東洋研究所兼任研究員、カーブル大学客員研究員）

2014 年、アフガニスタンは同国史上初となる選挙による国家元首の交代が行われた。4 月に第一回の選挙、そして 6 月の決選投票を経て、2001 年以降アフガニスタンを率いてきたカルザイ大統領の後任としてアシュラフ・ガニ大統領が選ばれた。同国の歴史上はじめて選挙によって国家元首が交代した瞬間である。

アフガニスタンの国内政治の動きがある一方で、タリバン政権が崩壊した 2001 年以降、13 年に渡り国際社会による支援が実施されてきたが、国内ではタリバンをはじめとする反政府武装勢力との戦闘が未だに継続している。

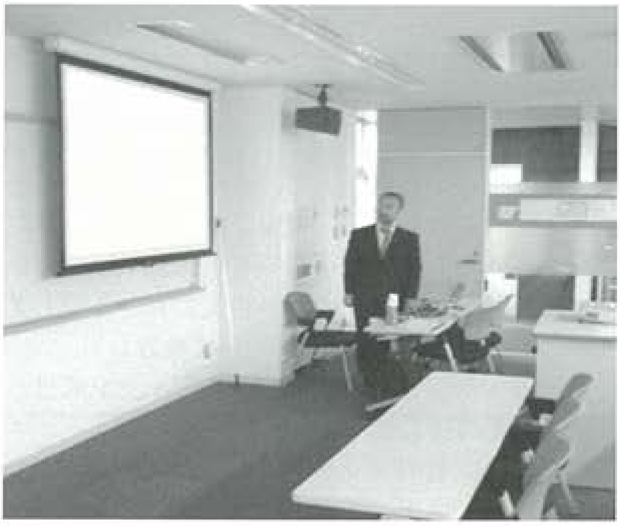
本講義では、このようなアフガニスタンの政治的動きを概観したうえで、農村社会に暮らす人々の今に焦点を当てて、現代アフガニスタンの一端を紹介することを目的とした。

アフガニスタンは、中国を間に挟んだ日本の隣国であり、地理的にはヨーロッパよりもはるかに日本に近い位置にある。しかし、私たちの認識においては、ヨーロッパよりもはるかに遠い国のように思われている。

他方、アフガニスタンの人々は非常に親日である。アフガニスタンは 1839 年から 42 年にかけての第 1 次アフガン戦争、1878 年から 80 年にかけての第 2 次アフガン戦争、そして 1919 年の第 3 次アフガン戦争で英国と戦い、1979 年から 89 年までは旧ソ連軍のアフガニスタン侵攻に抗して戦ってきた。アフガニスタンの人々にとって、日本は、アフガニスタンと同様に、英国、ロシアと戦ったアジアの兄弟国とみなされている。そして米国と戦い、原爆を 2 発落とされてもなお世界第 2 位の経済大国として復活した日本に対して尊敬の念を抱いている。首都カーブルの街にはトヨタの車両がほとんどを占め、人々は日本製の製品に高い信頼を置いている。

そのような人々の暮らすアフガニスタンは、1970 年代からの対ソ戦、そして内戦の影響で、世界で最も貧しい国の一つとなっており、また、最も汚職が深刻な国の一つともなってしまっている。内戦等によって農村部での基幹インフラである灌漑施設の多くが破壊されるとともに、社会的には「軍閥」と呼ばれる武力を背景にした野戦司令官たちが国内に多数生まれた。2001 年以降のアフガニスタンの新政府は、これら軍閥を中央政府に取り込みながら、非常に強力な大統領制の下で国の安定と再建を図ってきたといえる。

首都カーブルでは、新しいビルや豪華な家が次々と建設されるような発展がみられる一方で、農村



部では、家屋が破壊されたまま住民が未だに帰還できないなど、紛争の影響が色濃く残っている。筆者が現地で行った調査において、村人たちに生活での問題を問えば、多くが「経済状況（雇用、収入）」、農業のための「水」、そして家電や子供たちが夜勉強するための「電気」を指摘していた。村人たちが自らと家族の生活の維持・改善に取り組んでいる様子がよく分かる回答であった。また、農村部には内戦前から営まれてきた伝統的指導者会議（シューラ／ジルガ）が存在している。筆者が調査を行ってきたカーブル北方では、シューラと呼ばれる地域指導者たちによる合議体は、村人たちによって選ばれた代表によって構成され、村の運営に当たっている。シューラでは、村における公共施設や灌漑施設の建設や運営、村における日常的な諍いの処理、さらには、内戦中にはいずれの陣営に付くかの決定など、村人たちが、中央政府がどのようになろうとも、自らの村を自らで運営してきた歴史を持っている。

ここに、外国人が外から持ってきた「民主主義」や「ガバナンス」などの概念と、アフガニスタンの村人が営々と営んできた「合議」、「全員一致での村の運営」という実態との齟齬があることを、外部者である私たちは理解する必要があると思われる。どちらがよいか、どちらを政治制度の土台とすべきか、等は、外部の者が簡単に価値判断をし、決めることではないように思われるのである。

アフガニスタンは、そこに暮らす人々や社会、そして非常に親日国であることなどが報道されることよりは、対テロ戦争やアル・カイーダとのつながりが多く報じられている。本講義が、アフガニスタンへのさらなる興味や関心への契機となれば幸いである。（了）

2009年度～2013年度刊行『東洋研究』論文目録（172号～191号）

巻号	発行年月日	著者	論文
172	20090725	大谷　光男	天皇即位の冕服に関わる文献について
		小林　春樹	『漢書』「元后伝」・「王莽伝」の構成と述作目的
		福田　俊昭	『朝野僉載』に見える讖應説話（後編）
		岡崎　邦彦	1937年西北善後処理問題（上）―張学良拘束による西安と南京の対立―
		松本　照敬	ラーマーヌジャ思想の研究（6）
173	20091125	藏中しのぶ	三つの道璿伝―「鑑真伝三部作」における隆尊伝・道璿伝―
		安保　博史	芭蕉句「世にふるもさらに宗祇のやどり哉」考 ―芭蕉説話化の一道程―
		兵頭　　徹	海軍省調査課と嘱託の役割（五）―各種懇談会・研究会の活動―
		大杉　由香	日本におけるNPOの現況と問題点 ―日米比較を通して見えてきた課題―
174	20091225	相田　　満	六国史のキツネ ―その祥瑞と怪異をめぐって―
		渡邉　義浩	西晉「儒教国家」の限界と八王の乱
		新里　孝一	ケアと＜注意力＞　―S・ヴェイユをめぐって―
		柴田　善雅	第1次大戦期日本政府の戦争海上保険介入
175	20100125	濱　　久雄	太宰春台の易学思想
		小坂　眞二	十一世紀代の怪異六壬式占文について（下）
		山下　克明	陰陽道の特質と関係典籍
		田辺　　清	ルネサンス絵画と中国陶磁器（Ⅱ）
176	20100725	福田　俊昭	『朝野僉載』に見える嘲誚説話
		小林　春樹	『漢書』帝紀の著述目的　―「高帝紀」から「元帝紀」を中心として―
		兵頭　　徹	海軍省調査課と嘱託の役割（六）―海軍に正しい世界観を求めて―
		松本　照敬	ラーマーヌジャ思想の研究（7）
177	20101125	成田　　守	『御船哥』について
		安保　博史	几董俳諧と李白伝説―几董句「花火尽て美人は酒に身投げけん」考―
		岡倉　登志	ラビンドラナート・タゴールの思想と行動―タゴール生誕百五十周年によせて―
		大杉　由香	戦前日本における火災問題―過去の火災は現在に何を物語るのか―
		小湊　浩二	戦後の公的職業訓練制度の確立とその諸問題―日経連と総評の動きから―
178	20101225	小坂　眞二	御体御卜と陰陽道
		中村　　聡	中国近代化における西欧宣教師の影響―民主思想の紹介―
		柴田　善雅	東満洲産業株式会社と周辺会社の活動―「鮮満一体」経営を超えて―
		岡崎　邦彦	1937年西北善後処理問題（中）―南京側と西安側の交渉と内戦危機―
		齋藤　俊輔	タウングー王朝とアユタヤ王国の抗争における火器の役割（1498年-1605年）
		新里　孝一	ケアと＜依存＞
179	20110125	大谷　光男	金印蛇紐「漢委奴国王」に関する管見
		渡邉　義浩	王莽の革命と古文学
		池田　雅典	光武帝の圖讖「信奉」
		髙橋　康浩	韋昭『漢書音義』と孫呉の「漢書學」
		濱　　久雄	清代における漢易の展開―恵棟の『易漢学』を中心として―
180	20110725	福田　俊昭	『朝野僉載』に見える嘲嗤説話（前編）
		小林　春樹	『漢書』の正統観・漢王朝観について―板野長八の理解の再検討―
		髙橋　康浩	韋昭と神秘性―鄭學との關わりを中心として―
		松本　照敬	ラーマーヌジャ思想の研究（8）
		滝口　明子	欧米茶書の中の東洋―シモン・パウリ『煙草・茶論』研究―
181	20111125	武田　知己	外務省と知識人　1944－1945（一）―「ジャポニカス」工作と「三年会」―
		兵頭　　徹	海軍省調査課と嘱託の役割（七）―国内思想戦と調査課ブレーン―
		岡倉　登志	アメリカ帝国の形成と文化・イデオロギー―アメリカ-フィリピン戦争を中心に―
		齋藤　俊輔	ポルトガル領インディアの防衛と総督―1546年の第二次ディウ包囲を事例に―
182	20111225	安保　博史	芭蕉供養の研究―元禄期を中心として―
		由川　　稔	オユ・トルゴイ、タバントルゴイ、新鉄道等、鉱業関連領域に見る、モンゴル国の市場経済の深化
		柴田　善雅	中国関内開港地日系銀行の活動
		岡崎　邦彦	1937年西北善後処理問題（下）―「2・2事件」と三位一体の瓦解―

183	20120125	小坂 眞二	十二世紀代の怪異六壬式占文について（一）
		濱 久雄	礼の起源とその展開―凌廷堪の『礼経釈例』を中心として―
		渡邉 義浩	王莽の官制と統治政策
		中村 聡	『博物新編』と科学教育
		井上 貴子	インド古典芸能の美学とヨーロッパの美学 ―カラー、ラサ、バクティ、そしてアートの位置づけをめぐって―
184	20120725	福田 俊昭	『朝野僉載』に見える嘲嗤説話（後編）
		堀池 信夫	『中国自然神学論』の「鬼神」―ライプニッツの朱子解釈―
		相田 満	国文学（日本文学）研究におけるデジタル地名辞書の活用の可能性
		松本 照敬	ラーマーヌジャ思想の研究（9）
185	20121126	篠永 宣孝	ロシア革命後の露亜銀行再建の挫折、1917 ～ 1926 年
		滝口 明子	欧米茶書の中の東洋―ボンテクー『茶論』研究―
		齋藤 俊輔	ポルトガル領インディアとビルマのポルトガル人傭兵 ―ディオゴ・ソアレス・デ・メロの事例を中心に―
		林 裕	アフガニスタン農村における現状と意思決定構造
		柴田 善雅	南洋興発株式会社の関係会社投資
186	20121225	小坂 眞二	十二世紀代の怪異六壬式占文について（二）
		山下 克明	院政期の大将軍信仰と大将軍堂
		濱 久雄	明代における来知徳の易学とその影響
		中村 士	蛮書和解御用の創設とその後の天文方
		中村 聡	福澤諭吉と排耶蘇教問題
187	20130125	小林 春樹	『漢書』「五行志」における董仲舒の役割
		武田 知己	外務省と知識人 1944 － 1945（2・完）―「ジャポニカス」工作と「３年会」―
		岡崎 邦彦	管見「日中国交正常化 40 周年」―日中国交正常化とその後日中間の諸問題―
		嶋 亜弥子	農村女性リーダーへの職業訓練の展開―北京市実用技能訓練学校の事例―
		大杉 由香	戦前日本における災害の実態 ―全国統計を通して見えてきた生存の問題―
		小湊 浩二	戦後の公的職業訓練制度の確立とその諸問題（2） ―炭鉱離職者と職業紹介・職業訓練―
188	20130730	田中 良明	北斗星占小攷
		福田 俊昭	『朝野僉載』に見える酷暴説話（前編）
		岡崎 邦彦	西安事変前の中国共産党と蒋介石国民党 ―「反蒋」から「逼蒋」への転換と国共合作交渉の決裂―
		由川 稔	モンゴル国経済のマクロ的分析 ～モンゴル国経済のマクロ的概況と日本・モンゴル両国関係の基本的方向～
		松本 照敬	ラーマーヌジャ思想の研究（10）
189	20131125	中村 聡	19 世紀中国における改革論の段階的変化と在華宣教師
		篠永 宣孝	第一次大戦期の中国興業銀行の発展と変容―事業銀行か預金銀行か―
		鎗屋 一	現代中国における「歴史」の再生―音楽舞踏史詩『東方紅』の場合―
		嶋 亜弥子	農村女性リーダーにみる職業訓練の役割―北京市実用技能訓練学校の事例―
		柴田 善雅	「満州国」における日系証券会社の現地化
190	20131230	小坂 眞二	六壬式占の十二籌法と陰陽道（二）―神事占の占定占を中心として―
		濱 久雄	根本羽嶽と信夫恕軒との易学論争
		細井 浩志	国立天文台本『天文要録』について―旧内閣文庫本の再発見―
		髙橋 康浩	繆襲「魏鼓吹曲」について
		渡邉 義浩	諸葛亮の外交政策
191	20140125	大谷 光男	太歳庚寅銘の鉄製大刀について ―二〇一一年九月（福岡県）福岡市西区元岡古墳（群Ｇ６号墳）より出土
		安保 博史	蘇東坡と芭蕉
		相田 満	日本の借字文化について
		石井 寛治	両大戦間期における日本ブルジョアジーのエートス ―軍縮会議と満州事変への対応―
		齋藤 俊輔	ディオゴ・ド・コウトのポルトガル帝国論―『老兵との対話（第一の書）』を中心に
		林 裕	紛争影響下社会としてのアフガニスタン農村部 ―アフガニスタン・カーブル州北方郡部を事例として―

東洋研究所刊行物　(2014 年 7 月～ 2015 年 3 月)

【機関誌】

□東洋研究　第 192 号（2014 年 7 月 25 日発行）
岡崎 邦彦…西安事変研究―事変発生と事態の変化―
田中 寛…『満州補充読本』にあらわれた帝国の言語思想と異文化認識
植松 希久磨…中国語における新語の出現と社会的意義―『現代漢語詞典第 6 版』の語彙を中心として―
南里 浩子…イラン南部・遊牧民定着村の歩み―1963 年農地改革前後まで―
小林 春樹…ライデン大学における東アジア研究の歴史と現在－中国学と日本学を中心として－
フレデリック・ジラール…『講義要綱』の和譯の問題点
―日本に於ける初めての西洋哲学受容と土着信仰に適応の試みに着目して―

□東洋研究　第 193 号（2014 年 11 月 25 日発行）
小坂 眞二…陰陽道の六壬式占　研究余滴（一）
濱 久雄 …禘祫考
福田 俊昭…『朝野僉載』に見える酷暴説話（後編）
田中 良明…北宋楊惟徳等撰『景祐乾象新書』諸本管見
中村 士、イサベル・田中・ファンダーレン…本木良永が取調べた「限象観星鏡」の謎の解明へ

□東洋研究　第 194 号（2014 年 12 月 25 日発行）
渡邉 義浩…班固の賦作と「雅・頌」
小塚 由博…張潮と紅蘭主人の交友―書翰を手がかりに―
岡倉 登志…岡倉覚三（天心）と西洋美術（その 1）
齋藤 俊輔…ポルトガル＝アジア間の往来と「登録制度」
エリオット・ミルトン…昭和天皇と東京裁判

□東洋研究　第 195 号（2015 年 1 月 25 日発行）
相田 滿 …日本における幼学書の享受の視点から見た『蒙求』―故事の受容基準をめぐる考察―
柴田 善雅…シベリア出兵期対露貿易業者支援策と日露実業株式会社の活動
篠永 宣孝…1920 年恐慌と中国興業銀行の危機
中村 聡…最後期の排耶書「防邪訓」の意味するもの
クリスティアン・W. シュパング…日独関係史再説―明治時代から昭和前半までの概論―

【刊行図書】

□藝文類聚（巻 88）訓讀付索引（2015 年 2 月 28 日発行予定）
B5 判　　東洋研究所兼担研究員　中林 史朗（代表）他 8 名共著

□『茶譜』巻 7　注釈（2015 年 3 月 25 日発行予定）
B5 判　　東洋研究所兼担研究員　蔽中 しのぶ他著

□『お茶を愉しむ』（2015 年 3 月 25 日発行予定）
B5 判　　東洋研究所兼担研究員　滝口 明子著

※ 東洋研究所刊行物のうち、既刊の図書については、ホームページをご覧ください。

◇研究員消息◇

特別兼任研究員（第 2 班共同研究班）の安藤 正士氏が 2014 年 9 月 18 日、兼任研究員（第 6 班共同研究班）の近藤 正則氏が 2014 年 7 月 19 日逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

東洋研究所の理念・目的

東洋研究所の起源は1921年の貴・衆両院による「漢学振興ニ関スル建議案」の決議に由来する。この背景にある基本的理念は、①漢学を中心とする東洋学術の研究、②東西文化の融合による新しい文化の創造をめざすことにあった。この理念実現の推進母体として1923年大東文化協会が創設され、研究組織として、①漢学を中心とする東洋学術の研究部門として東洋研究部を、②東西文化の融合による新しい文化の創造をめざす比較研究部を設け、教育機関として大東文化学院を設立した。この二つの研究部は1953年学校法人大東文化大学付属大東文化研究所に継承され、1961年学校法人大東文化学園の振興計画の一環として、新たに「東洋研究所」として過去の①・②の理念を継承している。

東洋研究所の目的は、学則第6条に基づく大東文化大学東洋研究所規定によって定められ、「アジアを中心とする人文・社会・自然の科学的調査研究を行い、広く学術の発達に寄与すること。」とされている。当初研究局第一部人文科学系と第二部社会科学系の2組織がおかれ、その後専任研究員の就任に伴い人文科学班、政治・経済班、国際関係班の3班に分かれての研究活動に入った。時代の要請に従い個人研究はもとより、学際的・総合的共同研究の重要性を強調し、学際的メンバーによる研究部会を設け、研究成果を学術雑誌『東洋研究』に掲載するとともに、刊行物を発行し世に成果を問うている。また、研究成果を地域社会への還元として公開講座を開催し、国際交流の一環として、外国人講師による講演会等学術の発達に寄与することを目的に活動している。

刊行図書取扱店

■汲古書院
〒102-0072　東京都千代田区飯田橋2-5-4
TEL（03）3265-9764

■池上書店（大東文化大学板橋校舎内）
〒175-8571　東京都板橋区高島平1-9-1
TEL（03）3932-7567

■進明堂（大東文化大学東松山校舎内）
〒355-8501　埼玉県東松山市岩殿560
TEL（0493）34-4430

大東文化大学東洋研究所所報 No.62

2014年12月25日発行

編集・発行　大東文化大学東洋研究所
〒175-0083　東京都板橋区徳丸2-19-10
TEL（03）5399-7351　FAX（03）5399-8756
E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp
URL http://www.daito.ac.jp
印刷　（株）東京技術協会